

2020/12/30

(うと Q 世話し 初年度末 2 年目突入前の中間報告 )

「ニューノーマル探索サバイバル日記」と題してこの 1 年間、自分なりの探索を書いて参りましたが、1 年目最後の締め括りとしては以下の様な中間報告となりました。

曰く

「new normal (新常態=新しい当たり前) 等ありはしない。只、思い込みや思い違いを極力排し、実際の「状態」を可能な限り正しく認識する不断の努力があるだけだ」と。

どういう事かと言えば一例として

「街を人が歩いている」というのは誤った認識で

「街を歩いているのは男か女か男モドキ、女もどき、と両性具有の少なくとも 5 種の違った種族が歩いている。人等という抽象的なものはどこにも歩いていない」

という事です (以前の記事で既出)

その誤りがどんな結果を齎しているかと言えば

「男として或いは女として、といった言い方や考え方が taboo 視され、何でもかんでも「人として」という様になった結果、男の個性や女の個性がどんどん薄れて、中性的になってしまい、男から見て女が、女から見て男が非常に近似化した反面「類似平等」から来る弊害、即ち似て非なる物が隣にただで、少しも面白くもおかしくもない、魅力のないものになってしまった」

様な気がするのです。

近頃の言葉で言えば「友達夫婦」とか「友達以上恋人未満」

まるで「煮え切らない生米みたいな関係」

これでははっきり言って「退屈至極」です。

権利としての男女平等には全く異論はありません。

しかしそれを「人」という「架空平等存在」を持ち出し、男女が「相互平等理解の為」同じような個性でならなくてはならないという思い違いが無意識に発生した結果、本来差異があって興味津津な筈の異性が、将に興味関心も湧かない、魅力のないものになってしまっているのだとしたら？それが「少子化の真因」かもしれません。

「人として」という裏側には「同じ platform に立っているのだから「完全に」解り合える筈だ」という幻想認識があるような気がします。

男女は脳も体の造りも全く異なります。同じ物が全然違って見えている訳ですから完璧に解り合える筈がありません。

「解り合えっこないけれど、分り (分ち) 合える部分だけは共有しよう。不明は不明でいいし、魅力にもなるから、一緒に暮らそう」

完璧に解り合えるのが「常態 (当たり前)」だと思っている誤認識から完璧に解り合える事等ないのが「常態 (当たり前)」と認識を改めるような作業を、他の「それが常態 (当たり前)」だと思い込んでいる分野にも広げ検証し規定し直していく。

それを「常態（当たり前）」にするのが、前の言を借りれば「new normal（新常态＝新しい当たり前）」なのでは？と思った次第。

以上が中間報告でした。

年改まって来年は、その辺を探索したいと思っております。

では皆様、良いお年を。

（中間報告につき 1000 文字既定大幅超過、御免）